◀ミュージアムの象徴的作品である「人々のための岩に憑依する滝」＝秋本篤弥撮影

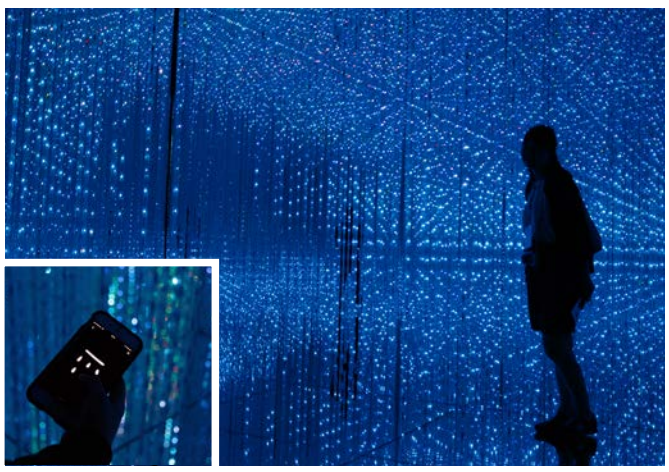
世界初！ 東京 お台場に デジタルアートミュージアム出現

6月21日、お台場のパレットタウン（東京都江東区）に世界初のデジタルアートミュージアムがオープンした。この施設は、都市開発に尽力している不動産会社の森ビル株式会社と、「ウルトラテクノロジスト集団」であるチームラボが初めて共同で運営するものである。

オープンに先立って、プレス向けの内覧会が6月中旬に開催された。今回、その内覧会に足を運び、海外メディアも注目するこの施設の魅力を取材した。

1万平方㍍の巨大空間の中には、「Borderless World」、「チームラボアスレチックス運動の森」、「学ぶ！未来の遊園地」、「ランプの森」、「EN TEA HOUSE」の五つの世界が広がっており、合計で約50種類もの作品がある。

「Borderless World」は、その名の通り、作品同士で境界を持たず、全体で一つの作品として捉える「作品群」が展示されている。受付を通ってすぐの入り口付近では、主に彩り豊かな花々が幻想的な世界を演出する「花の森」が広がっている。赤やピンク・黄のような暖色系の色味が中心のとき、辺り一面は華やかな雰囲気で満たされる。一方、青や紫といった寒色系の色味が中心のときは、花々が持つ本来の華やかさに加え、落ち着きのある凛とした雰囲気で満たされる。また、壁面を蝶が飛んでいて、壁に触れると、たちまち蝶は花のごとく地面に散ってしまい、物寂しさえ感じさせられる。そして、キービジュアルの一つにもなっている「滝」では、人を避けるように水の流れが変化する。同じ場所に立ち続けると、足下に鮮やかな花が咲きこぼれる。さらに、天井から足下まで細かな電飾が並ぶ「Wander through the Crystal World」では、スマートフォンアプリを用いて楽しむことができる。手元の画面にランダムで象形文字が表示され、そこから選択した象形文字が表す世界を映し出すことができる。例えば、画面で雨を選択すると、Bluetoothを経由して情報が届き、上から雨が降ってきているかのような世界が広がる。どの作品も世界と人々の境界を感じさせない「ボーダレス」な空間だ。



▲専用アプリ上で雨の象形文字を選択した様子と、それに伴い雨を映し出した「Wander through the Crystal World」＝秋本篤弥撮影

teamLab代表 猪子寿之氏 アート×テクノロジーの可能性を語る

「Borderless（ボーダレス）」というコンセプトについて、チームラボの猪子寿之（いのこしゅうじ）代表は、「人々の固定概念の枠組みを外し、世界と自分、他者との境界を無くし、価値観を広げる」と語った。

このミュージアムの特徴は二つある。一つ目は、各作品に対して展示室や額縁といった範囲を定める枠はなく、「一つの作品群」として展示していることだ。1万平方㍍という大規模な空間の中で、520台のパソコンと470台のプロジェクターを投入し、人々を作品の世界観へ没入させている。また、作品は人の存在に応じて毎回異なる軌跡を描き、部屋を移動する途中で他の作品とも混じり合い、影響を受け合い、常に変化し続けている。例えば、ある作品が今いる部屋から出ようとするとき、他の作品に対して、「今その部屋は空いているかどうか、そうでなければ、次の部屋はどうか」と問い掛け、コミュニケーションを取り合うことで、各部屋をランダムに回っていくのだ。この動きは全ての作品間でやり取りするようにプログラムされている。会場にいるスタッフでも、今どこにどの作品があるのか全く分からないという。まさに、デジタルアートならではの魅力だ。

二つ目の特徴は「順路がない」ことだ。他の美術館ではよく見受けられる順路案内をあえて設置せず、作品の中で迷い込み、日常生活ではあまり使われない「自ら探索し世界を認識する力」を使うよう設計されている。また、一つ目の特徴がそうであるように、そもそもこのミュージアムでは作品の位置を明確に示すことが不可能なのだ。

今回のミュージアムについて、猪子代表は、「境界がないアートとは、それぞれが独立した存在である一方、その境界が曖昧であることを指している。今は『意味が分からない』と言われても、未来において何かに繋がる場所にしていきたい」と、アートとテクノロジーの更なる可能性について希望を語った。

そうだ、夏フェスに行こう

もうまもなく平成最後の夏休みが始まる。皆さんはどのように過ごす予定だろうか。まだ予定が決まっていない人もいるかもしれない。そこで、気軽に行くことができて、素敵な思い出になるイベントとして「フェス」を紹介する。

「フェス」には、同じ価値観や趣味を持つ人々たちがたくさん集まる。その一つに「音楽フェス」が挙げられる。メディアで見る映像では、大勢の人々がステージの前で汗だくになりながら盛り上がっていたり、出演者が観客を煽っていたり、何となく「激しい」イメージがある。知らない出演者が多く、退屈に感じてしまうこともあるだろう。

出演者や内容によるが、一般的にフェスは激しいことで知られている。しかし、必ずしも「激しい」人々に混ざる必要はない。実際、少しステージから離れた場所や会場の端で、ゆっくり楽しんでいる人もいる。「激しそうだから」とフェスを敬遠しなくても良いのだ。

また、音楽フェスには、会場に来るケータリングカーで美味しいものを買い、レジャーシートの上でピクニック気分を味わうなど、ライブ以外の楽しみ方もある。

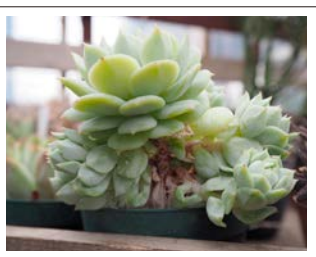
出演者は、有名なメジャーのアーティストからインディーズのアーティストまで幅広い。規模も、十数万人を動員する大きなものから個人主催の小さなものまで、さまざまだ。こうした多様な音楽フェスは、全国各地で開催されているので、気軽に訪れやすいのではないだろうか。

また、音楽フェス以外にも、キャンプのような「体験型」のフェスや、映画・スポーツなど多様な趣味を持つ人々が集まるフェスなど、さまざまな種類がある。

「なかなか自分にぴったりのフェスが見つからない……」そんな人は、フェイスブックをはじめとしたSNSで調べてみると良いだろう。個人主催の小さなフェスでは、ホームページよりもSNSで情報を発見しやすいこともある。

自分一人でこっそりと、あるいは恋人や友人と誘い合わせて訪れるのも良し。フェスにも多くのスタイルがあるように、その楽しみ方も三者三様だ。この夏はぜひ、自分に合ったフェスをチェックして、足を運んでみて欲しい。人気の会場はすでにチケットが売り切れてしまっているかもしれない。お早めに。

多肉植物



▲パキフィツム＝保泉里名撮影

ここ最近、多肉植物が人々の人気を集めているというウェブ記事をよく見かける。他の植物との違いは、見た目がユニークでかわいらしい形をしていることだ。多肉植物は雨の少ない乾燥地帯で育つため、葉や根に水分を蓄えようとして膨らむのだ。

これまでの説明だと縁遠く聞こえるが、実際は身近で良く見かけるものだ。よく見る多肉植物にはパキフィツムと呼ばれるものがある。これは実際に「SOLSO・FARM」という植物園で撮影した写真だ。カフェや美容室などで見かけることがあるだろう。葉が他の植物と比べてもひときわ肉厚になっていて、原子軌道の立体モデルのようだ。他にも多肉植物にはヨーグルトでなじみのあるアロエや、トゲのあるサボテンなどがある。いずれも100円ショップに置かれるほど、日常生活に浸透している。

見た目は特徴的だが、多肉植物は簡単に家庭で育てられる。水やりは、夏でも週一回の霧吹き程度でちょうど良い。多肉植物は乾燥地帯で育つだけあって、すぐには枯れない。むしろ水を与えすぎると枯れてしまうので注意しなければならない。

多肉植物にはさまざまな楽しみ方がある。例えば、簡単に苗の数を増やすことができる。大きめのしっかりとした葉を乾いた土の上に寝かせて置くだけで、次第に根が生え、茎が生え、一つの苗となる。すなわち、葉は種のようなものだ。また、いろいろな種類を一つの鉢に寄せ植えすると、オシャレで見栄えが良くなる。インターネットの通販サイトなどでは、多肉植物の葉の部分だけが売られていることも珍しくない。

試験勉強やレポートに追われる毎日。学習机の上に一つ多肉植物を置いてみてはどうだろうか。